



見知らぬ貴方への
聖譚曲

時計屋

1 夜に広がる (深谷 柚)

「どう思うよ？」

星河一真は外の風を浴びながら聞いてみた。

昼間の喧騒が嘘のように静まりかえっている。夜風の涼しさに、半袖のままの一真は秋を思った。

「どう、とは？」

冬朔夜は相変わらず落ち着き払って答える。時間が時間なのに、その声からは眠気の一片も感じられない。

「何でこんなに静かなんだろう、とかさ」

「どう静かなんだ？」

朔夜が質問で返してくる。少し面白がっているのが響きで分かる。

「うーん」

考えてみる。静かではあるが、この静寂は、誰もいない無の静寂ではない。

この雰囲気は、何となく知っている気がする。

「そうだなあ……ブザーが鳴って、幕が開くのを待つばかりの劇場、って感じがする」

「……」

「何だよ、その、まともな劇を見たことがあるんだろうか、とか言いたそうな目は！」

「それは被害妄想というものだろう」

「俺だって、オペラとか観たことあるんだぞ！」

「どんな内容の？」

即座に返されて、一真は詰まる。

「えーと……歌は綺麗だったよ。うん」

「途中で寝ていては筋はわからないだろうな」

「勝手に寝てることにするなー」

あまり間違っていないので反論はそこまでにしておく。

「お前、明日からはどうするんだ？」

「どうもしない。出席の義務もないし、寮にでもいる……いや、出かけるかもしれないが」

「えっ、参加する気ないのかよ？ 準備であれだけ苦労したくせに」

「それとこれとは別問題だよ。一般客も来るし、体質の問題だ」

「あ〜、うーん、そっか」

一度体験した身としては、それ以上強くは言えない。あれだけ人の心が聞こえてきたら倒れるだろう。

「というわけで、今年の苦情引き受け係は君だ」

「それって、どこかの部屋にずっといなきゃいけないのか？」

「いや、登録しておいたから、君の電話にかかってくるだろう」

「いつのまに……」

別に構わないが、何となく癪である。

「それにしても、今日、こんなに遅くまで残って、何かやることあるのかよ？ さっきからずっと暇なんだけど」

現在、午後11時11分。キリはいいが、アナログの時計で見てもあまり面白くない。

「仕事はないが、出迎えはしないといけないな」

「出迎え？ 誰の？」

「さあ」

肩をすくめる朔夜。

「おい」

「それでも必要だろう。そろそろ行くか」

傍らの荷物を持って歩き出す朔夜。一真はとりあえず追いかける。

「どこに？」

「大木」

魔技学園流翔敷地内で『大木』と言った場合、ある木を指す。

校舎の北東に位置する大樹で、どこかのコマーシャルに出てきそうなほど大きい。木の中には空洞もできているようで、うかつに入ると迷う。

「実はあれは、どこかの世界樹を株分けしてもらった」

「え、ほんと？」

「という話もあるが、真相は定かでないね」

「おい……」

嘘だと断じることができないのが、魔技の魔技たるゆえんである。

クラス数も多いが、学年ごとに校舎が別れているので、そこまで桁違いに大きいわけでもなく、すぐに校舎を通り過ぎて、『大木』の端にたどり着く。

「あ」

唐突に立ち止まる朔夜。

「何だよ？」

「行かない方がいいかもしれないな……」

「どっちなんだよ」

よく分からない。

「いや、出迎えは必要だ。君が行ってくれ」

「は？」

朔夜は荷物の中から包みを2つ取り出して、一真に押し付ける。

「こっちに火が入っているから、割ってこっちに点けてくれ。零時の少し前に」

「いや、そうじゃなくて」

「中心の幹のふもとならどこでもいい。木は燃えないはずだ」

「それでもなくて」

「ではまた、1週間後に」

勝手に別れを告げると、朔夜は去ってしまった。

「何なんだよ……」

少々気分を害したが、好奇心もあって、一真は『大木』の根元に向かう。

木々の隙間から、天頂の近くの満月が見えた。

静寂が支配していた。

風が葉を鳴らしているし、秋の虫の声もかすかに聞こえてくるが、それでもその場を仕切っているのは何か別の物だ。

時計を見ると、11時半過ぎ。まだ少し時間もあるので、幹の周りを回ってみることにする。

零時15分前。まだもとの地点にたどり着かない。敷地の大きさからすると少々おかしいが、空間が歪んでいたとしても一真は驚かない。

そろそろ止まるか、と思ったところで、前方に何か不思議なものを目撃した。

近づいてみると、不思議なものの正体が判明した。この場にそぐわない人工的な水色、トレーナーの色だった。

トレーナーの中身は、一真よりいくらか下の、おそらく小学生の男の子だった。『大木』によりかかって、眠っている。

「えーと」

もしかしたら、出迎えなければいけなかったのはこの子供なのだろうか。しかし、まだ零時よりは前だし。

「もしもーし」

とりあえず、起こしてみることにする。声をかけ、軽く肩を叩いた。

これで反応がなかったら放っておこうと思っていたが、しばらくして彼は目を開いた。

「うー、ん」

眠そうに目をこする。しかし、すぐに飛び起きる。

「あ！」

そして、左腕の時計に目をやる。子供に似合わない、金属製の男物だ。

「よかった……」

何だか知らないが、時刻に安心させる要素があったらしい。現在11時49分。

「何がよかったんだ？」

「うわっ」

慌てて後ずさろうとしたのか、背中を幹にぶつける。

「だ、誰ですか？」

「星河一真。お前は？ もしかして、うちの生徒？」

老若男女、人種も多彩な生徒群のうちに含まれているかもしれない、と思って一応聞いてみた。

「ううん、いえ、違います。ただ、今日ここに来ると、貴重な体験ができるだろうと、去年教えてくれた人がいまして」

「誰？」

「ナガレヤマカケル、だそうです」

「流山翔」

勝手に脳内変換して、考えてみる。どちらにせよ、一真のクラスにはいないようだ。s組なので、a組からr組についてはほとんど知らないが。

「で、お前は？」

「フカヤ、ユズ」

「字は？ 深い谷の植物の柚でいいのか？」

「さあ」

子供に似合わないしぐさで肩をすくめる柚（勝手に字を決定）。

「本名じゃありませんから」

「だったらもっと分かりやすい名前にしてもいいだろ」

「仕方ないじゃないですか。ずが曲者で。それよりもうすぐ零時ですよ」

「あ！」

思い出して、一真は包みを開ける。粉に近いほど砕かれた枯葉と、拳より少し小さい球。球の方は、中に火とも光ともつかぬものが浮いている。

「それ、何ですか？」

好奇心をくすぐられたのか、柚が聞いてくるが。

「さあ」

仕返しに先ほどと同じ言葉で反撃して、枯葉の粉の方を山にして根元に置き、球を叩きつける。

火が点いた。

不思議な火だった。白いかと思えば、ふと目を離すと紫になっている。

一真は腕時計に目をやる。2分前。間に合った。

「何が起こるんですか？」

「さあ……」

首を傾げる。これについては、本当にこう答えるしかない。

そして、しばらく待つ。

いつのまにか、静寂が強くなっている気がする。

零時を過ぎた。

さらに空気が強くなる。

静寂が響く。鳴らない鈴のように。

炎が揺らめく。灯台の光のように。

何かいる。

一真は唐突に思った。

ふと目に入った時計の針は零時過ぎで止まっていた。

何かいる。出迎え。静寂。

(ああそうか)

納得した。

あれは、誰かを待つ静寂だ。不在の無ではなく、期待の沈黙。
そして、現れたものがあるのなら。

「ようこそ」

自然と言葉が出た。

すると、音でない言葉が響いた。

返事だ。

そして、静寂が弱まっていった。何かが遠ざかっていく。

葉がざわめいている。

虫の声が聞こえる。

気がつくとも火は消えていた。幾重にも重なった梢の先に、天頂を過ぎた満月が見える。

「よし、帰るぞ」

呆然としている柚に声をかける。

時計の針は動き出している。

祭が、始まる。

2 朝に考える (深月 緑)

魔技祭は満月の翌日から1週間にわたって開催され、間の土日は一般公開である。とはいえ、平日も一般人立ち入り禁止ではなく、主に卒業生などが訪れることになり、決して閑散としているわけではない。

開会式はなく、始業と同じ時間に、チャイムでなく鐘の音がどこからか響く。

一真は校門でそれを聞いた。見回りの手始めとして、受付を見ていたのである。

ピリリリリ

そろそろ聞きなれてきた電子音が、懐で鳴る。そういえば、電話番号をどこだかに登録したと、朔夜が言っていた。

「もしもし、星河一真」

『不軌翹波よ』

フキアゲハ。誰だろう。どこかで聞いたような……。

『失礼なことに困ってるみたいだから言っておくけど、祭事委員の学年責任者で、行白の従姉妹の不軌よ』

言われて、やっと思ひ出す。声だけでなく姿もあつたら、後者の方は思い出せていたかもしれない。前者の方は、祭事委員の数が多いので何とも言えない。

「それで、もう何かあつたのか？」

『ううん、ただの確認。でも、できればちゃんと電話のかかるところにいなさいよ』

「電話のかからないところって、どこだ？」

『さあ？ 魔技の出している電波だから、少し次元がずれたくらいなら、この近所では通じると思うけど』

「俺の家で通じたことあつたけどな」

『近所でしょ』

自転車で50分は近所らしい。

『何か聞きたいことある？』

「うーん」

全く関係がないが、当座の問題をぶつけてみることにした。

「なあ、『大木』のお迎えって、どれくらい有名？」

『お迎え……ああ。あたしは知ってるけど、大半の人は知らないんじゃない？ 他の校舎でも何かはあるだろうけど、それは全然知らないし』

「ふーん」

なら、柚にそのことを教えた流山翔というのは何者なのだろう。

「お迎えの時にいた奴が、偽名でフカヤユズで、ずが曲者だって言うんだけど、どういうことだろ？」

ダメもとで聞いてみる。

『ずが曲者？ ……………嫌な名前ね』

「え？」

『まあ、魔技会に解決を求めると実技が1回増えるから、そんなにはかかってこないと思うわよ。じゃあね』

返事をしないうちに、電話は切れてしまった。最後の情報は有益だが、知りたいことを知ることとはできなかった。

(今の雰囲気だと、フカユズより、考えられる本名の方が嫌だって感じだったけど……)

どうやら、今言ったことだけでも、類推はできてしまうらしい。

(ずが曲者、ずが曲者……)

念仏のように呟きながら、校門から入ろうとした時だった。

「かずまー！」

どこかで聞いたような声が後ろから追いかけてきた。

振り返ると、私服姿の、一真と同学年の男子が駆け寄ってきた。

「齋!? お前、学校は？」

現れたのは、一真の近所の公立中学校に通う、碧谷齋であった。当然、魔技学園でなければ、平日たる今日は授業真っ盛りのはずである。

「いやだなあ、一真。そんなのどうにでもなるよ」

こうあっさり言うてしまう所が、齋なのである。

「どう? お祭は」

「まだ始まったばかりだって」

齋も大した返事は期待していなかったらしく、辺りを見回して聞き流す。

「冬くんは？」

何となく新鮮な響きだ。朔夜を名字や名前と呼ぶのはごく少数で、君付けはさらに珍しい。

「人ごみが嫌だからって1週間不登校児」

「引きこもりだねー。不健康だよ」

言い放題である。

「ま、せっかく来たんだから一緒に回ろうぜ。そこに名前書いてくれ」

受付には、来校者名簿がある。名前を書く欄があり、立場を選ぶ欄がある。

1. 卒業生
2. 在校生・教職員・卒業生の a. 親族 b. 友人 c. その他の知り合い
3. 近所の人 4. 他

齋は『深月緑』と書き、2-bに丸をつけた。

校門をくぐって紋証を付けてから、文句を言う。

「お前なあ、いきなり偽名使うなよ」

「嘘を書いたら攻撃してくる紙とかじゃなくてよかったよ」

ちらりとでもそう思ったなら本名を書け。

「大体何なんだ? あの名前」

「よく使う偽名」

よく使うのか。

「そうだ。お前、偽名に詳しい？ あ、たこ焼きひとつ」

入ってすぐの屋台で、たこ焼きを頼む。

「使うのと詳しいのは違うよ。何か、偽名について疑問でも？」

「ずが曲者って何だと思う？」

「……もうちょっと詳しくならない？」

さすがにこれだけでは分からないようなので、昨日会った子供が偽名でフカヤユズと名乗ったこと、ずが曲者ともらしたことを話した。

「フカヤユズ、ふ、か、や、ゆ、ず……。うわぁ」

「うわぁ？」

「妙に聞きなれた感じになったなぁ、と思って」

「え、もう分かったのかよ!？」

自分より頭が回るのは知っているが、速い。不軌翹波並みに速い。

「一真は、偽名使ったことある？」

「発音しやすいようにちょっと変えたことはあるけど。一真って所によって発音しにくいだろ？」

何せ今までの人生で、日本より、日本以外の国にいた方が長いのではないかというくらいだ。さすがに一番長くいる国は日本だが。

「それは愛称だよ。そうじゃなくて、つまり、自分の名前を隠す意図で、違う名前を名乗ったことがあるかってこと」

「何でそんなことしなくちゃいけないんだ？」

一真が首を傾げると、斎は苦笑した。

「偽名って言っても、その場しのぎのものと、そうでないものでは性質が違うね。でも、どっちにしても本人に何かかわりがあることが多いよ」

「何で？」

偽名については全くの素人なので、素直に拝聴させてもらう。

「前者の場合、とっさに思いつくものっていうのはやっぱり個性が出るから。もちろん、適当に目に付いた物を使うって言うのもあるけどね。その場合、あまり関係ないかな。今だと、丸鳥大とかね」

まるごと→丸、たこ焼き→焼き鳥→鳥、屋台→台→大、ということだと一応解説してくれる。目に付いた物と言った割にひねくれている。

「お待ちどー」

先ほど頼んだたこ焼きができあがった。屋台の前に、食べる席が用意してあるので、座る。

「……何で、そんなに大きいんだ？」

少し絶句した後、斎が言う。

「何言ってるんだよ。店の名前をみてみろって」

曰く、まるごとたこ焼きの店。

「たこって、まるごと焼く物じゃないと思うんだけど……」

「気にするなよ。で？」

一緒についてきた箸でまるごとたこ焼きをつつきながら続きを促す。

「えーと、何だっけ。ああ、長く使う偽名の場合。呼ばれた時に反応できないと困るから、大抵、響きとか、最初の字とかを元の名前に準じておくんだ。だから、深月緑」

「みつきみどり、みどりやいつき。ふーん。でも、偽名をちゃんと覚えてればいいんじゃないのか？」

わざわざ手がかりなど残さなくても。

「カクテルパーティー効果って知ってる？」

「パーティー？」

「つまり、パーティーとかの騒がしい所でも、名前を呼ばれたら気づくってことだよ。名前なんて、結構無意識の領域にも染み付いてるから、下手なのを使ったら勘のいい人にはすぐばれるよ」

「なるほど」

納得はするが、経験談めいているのは何故だろう。

「それはともかく、偽名だって明言して使うなら、反応の不自然さなんて問題にならないから、響きは似ていなくても問題ないね。でも、ずが曲者って言って、その偽名の中にずが入っているなら、まあ、何をやっているのかは分からなくもないけど」

「へ？」

そんなことを言われても、ちっとも分からない。

「遊び心のある人なら、一度はやったことがあるんじゃないかな」

「俺は、遊び心が無いって？」

「まあ、一真は難しそうだよなあ。それこそ、ずがあるし」

言われてみれば、ほしかわかずま、の中にもずがあるが、それがどうしたのだ。

「じゃあ、僕が、入宿積季って名乗ったらどう思う？」

「イリヤドツミキ？」

何だそれは。碧谷斎とは、響きも何も似ていない。

と。

「あ」

「分かった？ ……って感じじゃないね」

一真の視線は、校門の方に向いていた。正確には、今校門をくぐってきた、母親らしき女性と、小学校の半ばくらいの男女の子どもたちに。

「おーい、ゆずー！」

一真は立ち上がって叫んだが、少し遠いためか、男の子は振り返らない。

「彼が、フカヤユズ？」

「多分」

ふーん、と相槌を打った後、斎は座ったまま叫んだ。

「かずやー！」

声量は、先ほどの一真とあまり変わらないどころか、少し小さかったか。

しかし、彼は振り向いた。

一真に気づいたのか、こちらに駆け寄ってくる。

「昨日の星河さん。何だ、分かっちゃったんですか」

開口一番、そう言ってくる。ということは、カズヤというのが彼の名前で間違いないようだ。

一真は思わず齋を見た。

「単純なアナグラムだよ。かずとかしずとか言うのは名前として不自然じゃないけど、それをばらばらにしようと思ったら、ずの始末に困る。だから、ずが曲者。で、柚をひねり出した結果、名字は不自然になっちゃったわけだ」

アナグラム。

確かに、フカヤユズに、カズヤは含まれている。

「何だ、分かったのはそっちのお兄さんだったんですか。相談したらダメですよ」

非難されて、一真は居心地悪く頭をかいた。

「悪い。でもさあ、俺、偽名は専門外で」

「何だか、僕が偽名の専門家みたいで人間が悪いなあ。ああ、僕は入宿積季」

「齋……」

一真が白い目で見て、カズヤは考え込んだ。

「残るは、り、や、ど、み……。宮鳥、闇鳥、碧谷……」

「碧谷だよ碧谷」

「ダメですよ、答え言っちゃ」

カズヤに睨まれる。

「そんなこと言ったって、それ以上は決められないじゃないか」

四文字を並べ替えて、名前として不自然でない物がいくつあるのか。

「あ。じゃあ、深月緑さんて、あなたですね？」

「うん、そう」

何やら通じ合っているし。

「カズヤって、字は？」

「一の夜ですよ。例のナガレヤマカケルさんに、何をされるか分からないから、魔技では本名を名乗らない方がいいって言われたんですけど」

「ふーん。じゃあ、一仲間だな。大丈夫、一般人にそんなことする奴はめためたにお仕置きされるから」

一真が安全保障したが、一夜は一応警戒して、小声で言った。

「冬一夜です」

フカヤユズから、カズヤを抜いたら、フとユが残る。

確かに、聞きなれた響きだった。

3 昼に疑う (流山 翔)

「一夜？」

推定母親が、歩み寄ってくる。女の子も一緒だ。

「あ、お母さん。最近友達になったんだ。深月緑さんと、えーと、何とか一真さん」

「星河だよ星河」

斎より扱いが悪くなっている。というか、偽名だと分かっている斎はそのままか。

「どうも、冬葉月です。こっちは、二葉」

「よろしくー」

二葉というらしい女の子が元気に挨拶する。何となく、朔夜の親族とは思えない。

「よろしく。何年生？」

「3年生。9才」

「ふーん。じゃあ、一夜は高学年か、それとも中学生か？ お前も、冬の家族なら言ってくれりゃいいのに」

二葉に挨拶を返し、一夜に視線を戻す。

「？ ぼくは小6ですけど。でも、冬って、誰ですか？」

「誰って……冬朔夜だよ。俺と同じクラスなんだけど。兄とか、じゃない、のか？」

一夜の様子に、一真の言葉は次第に勢いをなくした。

「ぼくに兄はいませんし、さくやって名前は聞いたことないですよ。ねえ、お母さん？」

一夜が確認すると、葉月も頷いた。

「さくや……。知らないわ。知らない」

「え？ だって」

冬というのは、決してよくある名字とは言えない。それに加えて、夜の字だ。

「一夜くん、二葉の葉は葉月の葉だよな？ 一夜の夜は、父親からもらったの？」

戸惑っている一真に代わって、斎が口を出した。

「うん。お父さんはトモヤなんです。友達に、夜」

「お父さんは、おじいちゃんから友の字をもらったんです。国友って言うんですけど」

それを聞くと、斎は一瞬黙った。

「夜じゃなくて、友の方？」

「そうですけど……。何か？」

「いや、いいよ、うん」

斎が黙ると、話が終わったと思ったのか、葉月が声をかけてきた。

「一夜？」

「はい。深月さん、一真さん、また機会があったら」

一夜が去ろうとするのを、斎が止めた。

「ちなみに、従兄弟はいる？」

「いるけど、さくやって人はいませんよ」

答えた後、一夜は声を落として一真の方を向く。

「あの、できれば、去年この文化祭で会った、ナガレヤマカケルさんを探してもらえませんか？」

「例の？」

「はい。どこがというわけじゃないんだけど、何となく気になるんです。あの人」

「日本人？」

魔技生というなら、それを聞いておかなければならない。

「はい。そういう制服を着た、日本人です。一真さんよりはちょっと年上っぽかったかな」
一真の制服を示して言う。

「どこで会ったんだ？」

一真はとりあえず聞いてみる。

「あの、大きな木のある方です。あそこまで行かないけど、人はほとんどいなかった」

「こういうの付けてなかった？ 色は違うかもしれないけど」

齋が口を出した。一真の付けている、六芒星の紋証を指す。

「ううん。なかったと思う。少なくとも、気づきませんでした」

「お兄ちゃん」

今度は二葉が手を振って呼ぶ。

「見つからないかもしれないけど、お願いします。名前から手がかりがないかとも思ったんですけど、今日来てみたら、ここの校舎の名前が流翔なんですね。ここに通っている人だったら、誰でも名乗る可能性があるかもって思ったら、人が多すぎますよね……」

「いや、何とかして見つけるよ。きっと」

一真は請け負う。一人では無理かもしれないが、いろいろと手を借りればどうにかなるのではないだろうか。

「じゃあ、さようなら」

手を振って、一夜も去っていった。

「それにしても、冬の家族じゃないのか。おかしいなあ」

一真が首をひねっていると。

「それに関しては、僕はこれ以上つっこまないでおくよ。冬くんについて、そこまで知っているわけでもないし」

いきなりのリタイア宣言だった。

「え、何でだよ。何かおかしくないか？ あれだけ名前似てるのに」

「おかしいから、やめておくんだよ。僕は、彼の家庭の事情に立ち入る気はない。君がどうするかは、君が決めることだよ」

きっぱり言われて、一真は困る。

「家庭の事情……やっぱり、あるのか？」

「偶然、同じような名前だっていうんじゃない限り、あるだろうね」

思い出したかのように、座ってまたたこ焼きをつつきだす齋。

「何で、そこまではっきり言うんだよ」

「何で？ 彼らが冬くんの親類で、それでも知らないって言うんだから、事情がないほうがおかしいよ。嘘を言っているようにも思えなかったし」

「でも、ほら、疎遠な従兄弟とか、又従兄弟とか」

「夜の字は、友夜さんまで登場しないんだよ。たとえ友夜さんに男兄弟がいても、夜の字はかぶらせないんじゃないかな」

「えーと、国友の国の字を取って、国夜とか」

「一代前は何人兄弟が平均的だったと思ってるんだよ。三人以上男の子ができれば困るだろ？

そもそも、国で夜だとちょっと不吉じゃないかな。時代的にまずいよ」

確かに、それはそうかもしれない。

「だから、偶然夜の字が出てこない限り、従兄弟とか又従兄弟とかいうのはおかしい」

「だって……」

反論に詰まる一真。

「それにさ、朔夜の朔って、どういう意味だか知ってる？」

さらに続ける斎。

「え？ いや、知らないけど。あんまり見ない字だよな」

「朔望月とか言うけどね。つまり、陰暦の一日。元は新月って意味だし、暦とか北とかいう意味もあるみたいだけど、まあ、一日だろうね。そういう意味じゃ、一夜くんとあまり変わらない。多分長男だからじゃないの？」

「もしかしたら誕生日が一日……、いや、確か違ったな」

前に見たデータを思い出して、自分で否定する。

「一夜、二葉はそれぞれ1番目、2番目の子供だから。朔夜も1番目。結局、家系図のどこにも朔夜という名前が入る余地がないんだよ。普通に考えたらね」

「余地がないって……」

一真は視線を落とす。

「嫌だな、そういうの」

「名前だけでの話だけどね。ただの考え過ぎかも。隠し子程度の話で済めばいいと思ってはいるけどね。で、どうする？ 首突っ込む？」

斎気にした様子もなくそのままこ焼きをつついている。

「首……突っ込むべきなのかな。どうすりゃいいんだ？」

「さあね。僕はつっこまないと決めたから、後は君の問題だよ。僕と一真とじゃ、冬くんに対しては立ち位置が違いすぎるし」

「そうだけど……」

「じゃあ、ちょっと違う話にする？」

決めかねている一真に、斎は言った。

「違う話？」

「それ、冬くんもいつも付けてるの？」

一真の紋証を指す斎。

「俺の知る限りではいつも付けてるぞ。赤いけど」

一真のは副会長の青、朔夜のは会長の赤、ついでに、春子のは会計の緑。

「ナガレヤマカケルか。とりあえず、そっちの話当たってみるか」

たこ焼きを急いで食べて、立ち上がる一真。

「全く別の話になるかは分からないけどね」

「え？」

聞き返したが、斎は答えず、違うことを言う。

「じゃあ道すがら、その話について教えてもらえるかな？」

会ったという『大木』の近くに向かいながら、一真は一応、昨日のことを話した。

「で、そのお迎えだか出迎えだかを知っている人は少ないんだね？」

「らしいな」

「どれくらい少ないの？」

「さあ……」

一真とて、流翔副会長ではあるが、今学期になってから編入してきた身である。

「たとえばさ、去年、実際に迎えたのは誰なの？」

「え。知らない」

「分かる？」

「ええっと……ちょっと待てよ」

一真は、再び翹波に取ってみることにした。携帯電話についているリダイヤル機能に感謝する

。

「もしもーし」

基本的にはどこかの部屋にかかっているはずだから、誰が出るか分からない。

『はい、もしもし？ こちら祭事委員流翔部一』

元気な女の子の声が聞こえた。多分、翹波だ。

「もしもし、副流翔・星河一真だけど」

『ああ、星河一真。何の用？』

いつのまにかフルネーム呼びが定着している。

「去年の『大木』のお迎えって、誰が行ったか知ってるか？」

忙しいかもしれないので、すぐに本題に入る。

『お迎え？ 聞島鏈と冬朔夜でしょ』

答えはあっさり返ってきた。

「ちょっと待て。冬はともかく……何で聞島先輩？」

聞島鏈は中三の、幻瑞会長だ。

『ああ、あんたは知らないのね。聞島鏈は飛び級組で、本当はあたしたちと同年よ。去年の今頃はまだ流翔にいて、流翔会長やってたんだから』

これは意外な話だ。

「え、じゃあ、冬は最初から流翔会長じゃなかったのか？」

『そうよ。魔技祭が終わった途端に聞島鏈が上に行って、指名された冬朔夜が流翔になったのよ

。でも、祭前から引継ぎはしてたみたいだけど』

「へ、へえ」

知らなかった。

『他に用がないなら切るわよ。じゃあね』

電話は無愛想に切れたが、収穫は多かった。

「何だって？」

齋に電話の内容を話す。

「唯一の引っ掛かりが取れちゃったな……」

齋はつぶやく。

「え？」

「さて」

齋は足を止めた。校舎の端の方ではあるが、まだそこまで縁でもない。

「何だよ、齋」

「結論から言えば、ナガレヤマカケルは、8割くらいの確率で、冬くんだと思うよ」

「……残り2割は？」

「わざわざ偽名を使おうとする位は好きで、流翔会長を示す流翔を思わせる名前を名乗るのに躊躇しない程度に無謀で、お迎えのことを知っている人がいる場合」

「2割もあるか、それ……」

何となく予測できた答えではあったので、反論はしない。齋と違って一真の場合は勘だが。

「冬なら、お迎えも知ってるし、流翔っぽいのを名乗っても不思議はないってことか？ でも、偽名なんて使わなくても」

「魔技が変なところだとは言え、いつもいる魔技生なら偽名なんて使わない人の方が多いだろうね。ただ、冬くんだとすれば、理由は場所じゃなくて相手にあると思うよ」

「相手」

一夜だ。

「引っかかったのは、そのピン付けてなかったことなんだけど……まだ会長になってなかったんじゃない、付けてないのは当たり前だし」

「うーん……」

(ぼくに兄はいません、か)

「戻る」

一真は、校舎の方に足を向けた。

「戻って、どうするの？」

「生徒の家族の名前くらい、調べようと思えば、できる、と思う」

「調べるんだ」

確かめるようにくり返す齋。

「首突っ込むかは、調べてから決めるよ」

一真は、魔技会室に向かった。

齋を地上に待たせたまま、一真は地下の魔技会室に入った。

いつもは朔夜か春子がいるものだが、今の魔技会室は、当然のごとく誰もいない。

一真はコンピューターを起動して、生徒の情報を探す。

試しに星河一真を見てみると、家族欄に父母の名前と、職業(自由業)、住所(海外)が書いてある。いざというとき、海外というだけで連絡できるのだろうか、などと思う。

冬朔夜の情報は、意外と簡単に見つかった。

履修状況、成績、実技回数、現住所(流翔寮101号室)などが書いてある。

家族の欄は、白紙だった。

「え？」

他の生徒の情報をいくつか確かめてみる。なしと書いてある者はいても、白紙は他にいない。

ファイルの更新履歴を見ても。朔夜のデータが最後に変わっているのは、今年の8月31日。一真の編入が決まって、しかし、まだこの部屋に入っていない時期。

もちろん、データをいじった可能性があるのは2人だが。

「冬か……」

(立ち入るなってことか?)

決心が鈍る。

と。

ピリリリリ

タイミングよく電話が鳴った。

「もしもし」

懐から取り出して通話にすると、聞きなれてきた翹波の声が聞こえた。

『星河一真!?!』

声が急いている。

「他の奴は出ないけど」

『祭事委員控室に、電話がかかってきたのよ』

「俺に？」

尋ねる一真に、翹波は言った。

『弟を預かってるから、冬朔夜を連れてこいって』

一真は思わず、キーボードを叩いた。

4 夕に願う (冬 葉月)

とりあえず、一真は朔夜に電話をかけながら、祭事委員控室に向かった。

「ごめん、多分俺の紋証のせいだ。一般人もいるはずだったのに、いつものくせで付けちゃって」

『どちらにせよ、私を呼んでいるのだろう？』

雑音の多い電話の向こうの声は、慌てているのかそうでないのか、よく分からない。向こうも携帯電話のはずなので、仕方がないのだろう。

「そうだけど、俺相手に名乗ってるのが聞こえちゃったのかも」

『何にせよ、責任追及より問題解決のほうが先だ。おそらく責任の比重も、君より私の方が大きい』

「何でだよ。名前聞かなきゃ冬の弟かどうかなんてそもそも分からないだろ」

『その話はもういい。あと——そうだな、1時間くらいで着くと思う。それまでどうにかしてくれ』

「あぁ——どうにかするさ」

方法は思いつかなくても、それしかない。

電話を切って、一真は本格的に走り出す。

地上に出たあとにここから来るまで、いつのまにか齋がいなくなっていたが、とりあえずそれは後回しだ。

「おい、不軌——」

祭事委員控室になっている、3階のt組予定教室に飛び込んだ。

翹波と、祭事委員らしき数人の生徒。葉月と二葉。そして、内線電話で話している少年が1人。

「齋？」

「じゃ、また」

軽く言って、齋は電話を切った。

「どこ行ったかと思えば……何やってんだよ齋」

「犯人と話してた」

「……は？」

耳を疑う一真。

助けを求めて、翹波の方をしてみる。

「あんたの代理だって言うから」

「いつ代理になったんだ」

「嫌だなあ、一真。何年の付き合いだと思ってるのさ」

唐突な言葉に、一真は戸惑いながら答える。

「えっと……日本にいる間なら、1年ちょっとだろ」

「君の声くらいなら真似られるよ。まあそれはそれとして、犯人は1人っぽかったよ。割と突発的な犯行みたいだね。冬くんが着くにはしばらくかかりそうだって言っておいたけど、実際の所どう？」

「……1時間くらいだって」

いろいろと突っこみどころはあったが、とりあえず答えておく。

「それで、どうして一夜なんです？」

黙って聞いていた葉月が口を開いた。

「聞けば、犯人は一夜の兄を指名しているとか。ですが、一夜には兄もいないし、朔夜という名前も、全く聞いたことがありません」

「名前が似ているからじゃないですか？ 名字も同じですし」

責めるように言う葉月、なだめるように答える齋に、一真が割り込んだ。

「本当に、全く知らないのかよ？」

強く見据えて言う一真に、葉月は戸惑いながらもはっきり答えた。

「ええ、知りません」

そんな葉月に、一真はさらに何か言おうとして、結局口を閉じた。

「じゃあ、対策を練りますのでまた」

齋が一真を引きずって部屋を出た。

「何やってるんだよ、喧嘩売って」

「だって……」

「結局、一夜くんたちが冬くんの親族かどうかは、確かめられなかったんじゃないの？」

「確かに、うちのパソコンからはあいつの情報消されてたけど……」

近づいてくる2つの足音を聞いて、一真は言葉を止めた。

「冬!？」

「何だ」

「い、1時間てのは」

「普通に來たらな。転送室に無理を言って送ってもらった」

「転送室は通常送る側であって迎える側ではないのに、無茶をする」

もう1人が、ため息混じりに言った。

「春宮？ 何で？」

「一緒にいたのだから、共に来てもいいだろう」

「……一緒にいたのか？」

「社会科見学に浄水場へ」

「……」

朔夜も春子も、本当か嘘か読めない表情だが、多分本当なのだろう。

「電話がかかってきたのはここで、一夜くんの母親と妹がいるよ。電話はそのうちまたかかってくると思うけど、冬くんが来るのには時間がかかるって言っちゃったから、しばらくはかかってこないかも」

齋が状況を告げた。

「なら、中に入るか」

春子が教室のドアを開けた。

「待て、春宮。……少し、休みたい」

朔夜が止める。

一真は、彼の顔色が少し悪いことに気がついた。考えてみれば、転送室は1階にあり、3階に来るまでにどれくらいの人がいたのか。

「お前、大丈夫か？」

「支障があるほどじゃない」

「方針は決まったんですか？」

春子が開けたドアから、葉月が顔を出した。

朔夜の表情がこわばったのを、一真は見逃さなかった。

「新しい人ですか、こんにちは。早く一夜を助けてください」

葉月が春子に目を留めて言った。

「はじめまして。……しかしご母堂、わたしより先に挨拶すべき人がいるでしょう」

春子の言葉に、葉月の視線は春子から外れてさまよい、朔夜のいるあたりを通り過ぎて、結局定まらないまま春子に戻ってきた。

「他に誰か？」

場の空気が凍った。

「な、何で冬を無視するんだよ！」

「無視？ 誰を？」

「誰って！ あんたの——」

「やめろ、星河。意味がない」

声を荒らげる一真を、朔夜が止めた。

一真は、その声の調子がいつもと変わらなかったことに驚いた。

「何でだよ、お前が無視されてんだぞ！」

「やめろ」

対して朔夜は静かではあるが強い声でくり返した。

その声に秘められたものに圧されて一真は勢いを失う。

「……だってこんな」

言葉の見つからない一真を置いて、朔夜は葉月の横をすり抜けて部屋に入った。相変わらず、葉月は朔夜の方を向きもしない。

「どうしたんですか？ 作戦の打ち合わせでも何でもいいから早くしてください」

一真の様子を不思議そうに見て、葉月はあくまで一夜のことを言った。

「一真、少なくとも今は、この問題は触れないのが賢明だよ」

齋が近寄ってささやいてくる。

「何で」

唸るように一真は返した。

「見たところ、意識して無視した動きじゃないよ。視線も留めなかったんだから」

「だからって」

「一夜くんのこともあるんだから、後回しにはしておいた方がいいってことだよ」

言うだけ言って、斎の教室の中に入る。合わせて葉月も引っ込んだ。

一真は、最後に残された春子に目をやった。

「ここまでだとは思わなかったな」

春子がもらす。

「え？」

「前に、長期休暇に帰省しなかった理由を聞いたら、実家にいづらいからだと言ったんだ奴は。いづらিদと？ あれでは、そもそも居場所があるものか」

珍しく怒った様子で言葉を並べ、春子も中に入った。

夏休みに学校にいたのは、どうやら仕事のせいだけではなかったらしい。

そんなことを思いながら、一真も皆の後を追った。

入ると、朔夜が内線を何やらいじっていた。

「何やってんだよ、冬」

「実は、番号記録機能がある」

よく見ると、内線のある部分に手持ちの装置をつないでいた。装置には、デジタル数字を表示する無愛想な画面が一つ。

少しして、何の音もせず、そこに4桁の数字が映った。

「第一体育館の内線3……地下か。場所を選ぶ程度の知恵はあるか」

一真はやっと把握してきた校内地図を頭に思い浮かべた。第一体育館が一番大きい体育館で、ここからここまで遠いわけでもないが、イベントや屋台は多い。当然人も多い。

「行ってくる。もし途中でかかっていたら連絡してくれ」

言うと、朔夜は振り返り、また出口のほうに向かってくる。

「待てよ。1人で行くのか？」

「少なくとも、私を呼んでいたんだらう？」

「そうらしいけど、俺も行くよ」

「いや、君は」

「俺も行くよ」

反論の前に繰り返す。

しばし、無言のにらみ合い。

「行くぞ」

一真は返事を待たずに踵を返し、教室を出て体育館に向かう。

「場所を言うんじゃないか……」

後ろから、呟く声が追いかけてくるが、無視する。

一階に着いて人が多くなると、走る朔夜に抜かされた。慌てて一真も走る。

朔夜は体育館の入り口を走り抜け、裏まで行ってやっと息をついた。

「何だよ冬、体育館じゃなかったのか？」

「今は演劇部の公演中だ」

「そうかもな」

そんな細かい所まで知らない。

「表から入るのは無理だ」

何をやっているかはともかく、さっき走り抜けたときに見た様子からも、確かに人は多い。多すぎる。

「お前、大丈夫か？」

体育館に正面から入るのは論外としても、3階からここまででも、かなりの人に遭遇している。いつも教室で授業を受けてはいるが、あの程度が限界だといつか聞いたことがあった。朔夜は他のクラスと合同の授業には出席しない。

「地下空間のほうが広いはずだ」

一真の問いには答えず、朔夜は違うことを口にした。多分大丈夫ではないのだろうが、相手が気づかないうちに奇襲した方がいいのは間違いがない。

「今、結構人に見られた気もするけど、犯人に伝わってないかな」

人質がいるのに強攻策が実行前に知られるのはまずい。

「本当に犯人が1人なら、一夜から目を離すわけには行かないだろうから、むやみに出歩きはしないだろう。それに気づいても、手元に切り札があるのだから私が来るのを待つだろう」

言い切る朔夜。一真はふと不安になった。

「大丈夫か？」

さっきとは別の意味で尋ねる。奇襲と言っても、人質を傷つけられないほどすばやく制圧できるものなのか。そもそも、敵の強さも分からない。

「犯人は日本語を話していたのだろうか？」

「え？ まあ、そうだと思うけど」

戸惑いながら答える。斎と問題なく話していたのだからそうだろう。

「十中八九はどうにかなるだろう。星河、ここの地面ぶち抜けるか」

言われて、少し前の言葉を思い出す。多分、この下は体育館の地階だ。

「私の記憶と方向感覚に間違いがなければ、内線はこの辺りにはないはずだ」

「音で気づかれないか？」

「地下の天井を壊すが部屋にいる者にダメージはない、そこまで制御はできないだろう？ 相手が交渉しようとしているのなら何とかなるだろう」

自信の理由が一真にはよく分からなかったが、時間もないし信じてみることにした。

靴から警棒を出して気を込め、振りかぶり、真下に振り下ろす。

派手な音がした。

穴は割とうまい具合に空いた。床までは達していないようだし、人に当たった様子もない。

朔夜がまず飛び降りた。

「動くな」

男の声が朔夜に飛んできた。どうやら、犯人は意外に近くにいたらしい。その声に、一真も下手に動けなくなる。

「拳銃か？ 陳腐だな」

朔夜が言う。よく見えないが、銃口が向けられているのかもしれない。

「次は武器を捨てろ、か？ まあいいが」

朔夜が懐から拳銃を取り出して放り捨てた。同時に、部屋の奥に歩き始める。

「な、動くなと」

「その言葉を返そうか？ 動くな」

朔夜の言葉がやけに響いた。朔夜の行動にあわせて飛び込もうとしていた一真の動きも止まる。動くことに何故かためらいがある。

(何だ?)

疑問は生じたが、朔夜が視界内から消えてしまったので、慌てて飛び込む。何となく、放っておくと朔夜は結構無茶をしそうだ。

降りると、部屋の様子が分かった。どうやらここは物置らしい。かなり広い。奥のほうに内線電話が見えた。

そして、大道具だろうか、泉を描いた大きな看板を背に、男が立っていた。一夜は足下にいる。手が後ろ手に縛られているが、意識もあるし、ぱっと見怪我はなさそうだ。

男は朔夜に銃口を向けているが、正面から歩いてくる朔夜に、何故か打とうとはしない。

男と朔夜の距離が、1メートルほどに縮まった。

「き、来たれ光の柱！」

「黙れ」

男が呪文のような声を上げたが、朔夜がその声をさえぎった。それきり、男の言葉は続かない。

朔夜は距離を一気に詰めると、胴体に拳を打ち込んだ。

(うわあ)

一撃に気がこめられていたのが分かったので、一真は男に同情した。

男が吹き飛び、背後の看板が壊れた。

と、描かれていたのと全く同じ泉が現れ、残骸と男は沈んでいった。

「ふ、冬あれ……」

朔夜に近寄って泉を示すと、彼は何とも言えない目で一真を見た。

「やはり君には効かないんだな」

「え？」

朔夜は首を振った。何を否定したのかはよく分からない。

「どうせ、どこか次元の違う所に飛んだだけだろう。いい薬だ」

「そうかもしれないけどさあ……」

魔技学園恐るべしである。

一真が泉を眺めている間に、朔夜は一夜の縄を解いていた。一夜が、何か言いたそうな目で朔夜を見る。

「じゃあ星河、一夜を連れて帰ってくれ」

「って、お前は？」

「この場の後始末もあるし……あの部屋まで帰るのは骨だ」

一真は直感的に気づいてしまった。朔夜が言っているのも嘘ではないが、おそらく彼は、葉月に会いたくないのだろう。

「ま」

一夜が声を出した。そして咳き込む。

「ま、待って」

やっとのことで絞り出したような声だ。視線は朔夜に向いている。

「無理にしゃべるな。今は話そうとする気になるのは相当きついはずだ」

「冬？」

一真が疑問符を浮かべる。

「聞こえるのと同様、心に作用することができるというだけだ。私の声が心に割り込むだけだから、日本語を理解できなければ効かないだろうが。対象も絞れないし」

一真がそれに対して何か言う前に、朔夜は一夜に告げた。

「犯人が何と言ったのかは知らないが、それはおそらくデマだ。君と私は、名前が似ているだけで何の関連もない」

言い切った。

「冬、それは」

「君には関係ない」

朔夜ははっきり一真の口出しを拒絶した。その躊躇いのなさが、一真を決断させた。

「……ふーん」

気のない相槌を打つ。

「そう言うなら、今はそれでいいことにしといてやるさ。行くぞ、一夜」

不機嫌にまくしたてると、一真は穴の下まで一夜の手を引いて。

「……どうやって上るんだ？」

間抜けだった。

5 夜に祈る (冬友夜)

夜風に朔夜は目を覚ました。

違和感を覚える。一夜を無事助け出し、冬一家は帰宅し、朔夜は魔技会室にあるベッドで寝ていたはずだった。屋内で夜風に当たるはずがない。

目を開けると、夜空に浮かぶ月が目に入る。満月は昨日なので若干欠けている。下のほうから夜になっても収まらない喧騒が聞こえる。

(……何だ?)

「お、起きたのか」

声に見やると、一真が柵に寄りかかって地上を見ていた。校舎の屋上であることをやっと認識する。座っていたので立ち上がる。

「何で私はここにいるんだ？」

「俺が連れてきたから」

簡潔な答えだった。

「その理由を聞きたいんだが」

「そうだなあ——何て言うか……」

朔夜は何となく一真に違和感があるような気がした。

「多分俺、基本的に見ないふりってできないタチなんだよ」

気がついた。いつもと違って、話しているのに一真が朔夜の方を向かない。

「……冬葉月の話か？ あれはどうもできないし、君には関係ないから気にしなくていい」

葉月の名前を口にするのに少し思い切りが必要だった。何が起こるわけでもないのに。

と。

ガチャガチャガチャ

校舎からのドアが揺れた。

「星河？」

「鍵閉めただけじゃないか」

なぜ鍵を閉める。

朔夜は疑問に思ったが、音はそれきりで止んだ。

「そういえば、春宮に聞いた。お前、入学して来る少し前まで口利かなかったんだって？」

(春宮！)

何を話しているのか。

「子供の頃は制御する自信がなかっただけだ」

「今はあるのか？」

「……多少は」

「何で自信ができたんだ？」

「自信と言うよりは、そうだな、単に、私の能力など効かない者が、しかも複数いることを知っただけだが」

「どんな人に会ったんだ？」

「とりあえず、春宮と聞島だな」

春子は日本語で思考しないし、鏈は能力全般が効かない。

「ふーん、聞島先輩もか。春宮は、やっぱり日本語分からないとダメなのか？」

「耳栓でも防げるさ」

それに。

「君にも効かないようだしな」

「ああ」

そのことにどれだけ感謝しているのか、彼に直接言うことはないだろうと思う。

と、一真がちらりとドアの方を見た。さっきの音以来誰かがいる気配はない。

「一夜のことがあった時に、本当にお前の家族かどうか調べてさ」

唐突な言葉にどきりとする。いや、確か、情報は消してあったはずだ。

一真が初めてこちらを向いた。

「ごめん。……その後もいろいろ調べちゃった」

調べた。

何を？

「データベースは……」

口から出たのは思っていたのと違う言葉だった。

「だって、^{うち}流翔のパソコンから見られるのって、うちのデータだけじゃないし」

そういえば、一真は他の魔技会とハッキング合戦をしているような中学生であった。

「見られるからと言って」

「分かってるよ。悪いとは思ってるけど、見ちゃったものなかったことにはできないし」

それで最初の理由に戻るのか。

無言でいる朔夜に、一真はさらに言葉を続けようとする。

「で」

言いかけて、一真は一度入り口の方に行って戻ってきた。人目でも気にしているのか。

「聞いちゃいけない気もするんだけど、よく分からないから聞いてもいいか？」

「聞いてみたらどうだ？」

投げやりに答える。

「入学した後に、DNA鑑定を依頼してるのは何で？」

それは。

「星河!!」

「結果、お前は間違いなく友夜さんと葉月さんの子供だった。だからなおさらよく分かんないんだよ。別に浮気とかしてたわけじゃないんだろ？」

調べようとした理由。

「……君には分からない」

「そりゃ、俺には普通に親がいるけどさ」

「君が同じ立場だったとしても」

一真の言葉を朔夜はさえぎった。

「多分君には理解できない」

「何だよそれ」

一真はまだ何か言いたそうにしていたが、朔夜に教えるつもりはなかった。

もしも親が違ったら。

もし、本当の母親が別にどこかにいたら。

一真には分からないだろう。

自分を受け入れてくれるかもしれない母親、そのわずかな可能性を求めて親を疑った。

「もしかしたら君は勘違いしているかもしれないが、冬友夜は私を無視もしなかったし、共に暮らしてもくれた」

「ああ、単身赴任してたんだってな」

朔夜の記憶には、葉月に育てられた覚えがない。

耳が遠いおかげで『声』の効かないらしい祖母に育てられ、幼稚園に入る前に対面させられたときには、既に葉月には朔夜が見えなかった。

小学校に入ってしばらくしてその祖母が亡くなり、どうやったのかは知らないがいきなり単身赴任になった友夜が朔夜と一緒に暮らしてくれた。

「とにかく、彼はこの能力にもかかわらず普通に接しようとしてくれたし、私はそれに感謝している」

しかし、朔夜はその父親を疑った。

そういうことだ。

「単身赴任になったのって、お前と一緒に暮らしてくれって言ったからなのか？」

「言うわけがないだろう」

「何で言うわけがないんだよ」

「私が冬友夜と暮らしていた4年間、一夜と二葉は父親と暮らせなかった」

だから魔技では察に入ったのだ。

「だから、私は言わなかった。が」

「が？」

一真が怪訝そうに首を傾げた。

「拒否もしなかった」

「当たり前だろそんなの」

微塵の躊躇もなく一真は言い切った。

「君はさっきの言葉を聞いていないのか」

「一夜と二葉な。だから？」

「だからって……」

そんなにあっさり片づけていい問題ではないはずだ。

「さっきお前は子どもの頃って言ったけど、今だって子供だろ。それに、親にとってはいつまでも子供は子供だって言うし」

「だから？」

さっきの言葉を今度は朔夜が言う。

「星河家では、1年にひとつ、子供のわがままは聞いてもらえるんだぞ」

「……それは君の家だろう？」

「だからそうじゃなくて！ お前は聞きわけがよすぎるって言ってるんだよ！」

勢いで柵を叩く一真。金属音が聞こえる。

「何故君がムキになる」

「お前は13年分わがままがたまってそうだから、友夜さんにでもきいてもらえよ！」

一真の勢いに圧倒されるが、何とか言葉を紡ぐ。

「人の話を聞いているのか君は。冬友夜に会うのは3か月に1回くらいだからまだ先だ。今はこちらの家に戻ってきているし」

「来るよ」

いきなりの断言だった。

「理由がないのに何故来る」

「理由はこれ」

一真はどこからか、1枚の紙を取り出した。

「ファックスで送った」

受け取って見てみる。

お手本のような字で『お宅の子供、冬朔夜を預かった。彼の命が惜しくば魔技学園流翔校舎の屋上まで来い』とある。

朔夜はむしろ呆れた。

「何だこれは」

「脅迫文」

「しかも、この字は春宮だな？」

「そうだよ」

「大体、こんな手紙で来るものか。……待て、ファックスで送ったと言ったな？」

「うん」

番号は調べたときに分かったのだからいいとして。

「冬葉月の目に触れるかもしれないじゃないか！」

「うん」

頷く一真を見て、朔夜は唸る。

「……確信犯だな？」

「——うん」

「まったく！」

朔夜はドアの方に向かおうとして足を止めた。確か、この屋上は鍵がないと開錠も施錠もできない。

「君が鍵を持っているのだろうか？」

「うん、持ってる」

「貸してくれ」

「何で？」

「何で、じゃない！ 冬葉月が悪戯としか思えないものに冬友夜が対応したら不審に思われるぞ？ それこそ隠し子かという話にでも転んだらどうする！」

「ある意味隠し子じゃないか」

「星河！」

「お前は来てほしいと思ってるのか？」

一真はまっすぐ朔夜を見た。思わずたじろぐ。

「大体、来たとしても君はどうするつもりだ」

「来なかったら殴りに行くよ」

「星河！」

「はいはい」

またも朔夜が非難の声を上げた所で、一真も観念したのか鍵を渡してくれた。

受け取ってドアに急ぐ。さっきのは悪戯だと知らせなければいけない。電話か、それともファックスの方がいいだろうか。

(電話……)

たとえ電話口を通して、朔夜の声は葉月に届かないのだろうか。

そんなことを考えていたためか、ドアの直前まで気づくのが遅れた。

<わあ、来るよ、どうしよう。いや、むしろ久しぶりだし顔も見たいからいいか>

人がいる。

(いや、この声は)

朔夜は確信すると、複雑な鍵を開けるのももどかしくドアを蹴り開けた。

「うわあ！」

目の前に冬友夜がいた。

「お父さん……」

スーツ姿の父に呆然と朔夜が眩いていると、一真が背後から寄ってきた。

「あーあ、何やってんだよ。鍵の意味ないだろ」

「星河……」

「実は送ったのこれだった」

一真がもう1枚紙を取り出した。

『冬朔夜について話があるので、魔技学園流翔校舎の屋上の前で待っていてください。』

朔夜の友人 星河一真より

今度はやや雑な感じの、一真の字だった。

「実はって……」

「君が星河一真くん？ 初めまして、冬友夜です」

「あ、どうも」

朔夜が呆れて二の句が継げない隙に、一真と友夜は挨拶を交わしている。

「学校での朔夜はどうか？ 変なことしてませんか？」

「そうですねー、」

「待て」

何となく放っておけずに口を挟む。

「何をそんな、普通の父親みたいなことを言ってるんだ、この状況で！」

とりあえず父親にくってかかる。

「何を言っているんだ朔夜、私は普通の人間だし父親だから、普通の父親だ」

それは屁理屈だ。

「それに、君の本心が少しでも聞けてうれしいよ」

その言葉にはっとして一真を見る。

「立ち入った話をしたのも確信犯か」

「うん」

朔夜はため息をついた。

入り口の方を気にしていたのは、人がいないことを確かめていたのではなく、いることを確かめていたわけだ。

ぼん、と頭が叩かれた。友夜だ。

「さ、帰ろうか」

<この子には、やっぱり母親が必要なのかなあ>

ついで聞こえてきた心の声に心臓をつかまれる。

この父親は、多分、このことを口にはしない。朔夜に聞こえていることが分かっている。

「どこに帰るといふんだ」

朔夜も珍しく聞かないふりをして会話を続けた。

「そうだ、こいつの部屋に泊まって行ってやってよ友夜さん」

一真が妙なことを言い出す。

「寮の部屋か。泊まっていても大丈夫かい？」

うれしそうに友夜が聞いてくる。朔夜は気圧されながら答えた。

「申請をしないと……」

「冬——朔夜は権力があるから大丈夫だって。それくらい」

事務的なことを言っでごまかそうとしたが、一真に邪魔された。

朔夜はにらむが、一真はどこ吹く風である。

「そうか、権力は大切だよ、朔夜。でも、私より偉くならないでね？」

友夜に言われて朔夜は視線をそらす。既に陰で社長をやっているのは秘密である。

仕方なく友夜に引きずられるように階段を下りていくと、後ろから一真の声がかかった。

「友夜さん、一つ聞いても？」

「どうぞ」

「答えによっては殴っても？」

「……どうぞ」

「星河？」

不穏な空気に疑問をはさむ。

が、一真は無視して質問した。

「一夜が一夜なのは何ですか」

少し前には自分に向けられていた心臓を射る視線が、友夜に向けられる。

葉月に対して怒った一真、来なかったら殴りに行くという言葉。

一真は実は、友夜に対しても怒っているのかもしれない、と気がついた。

「星河……」

やめるように目配せしたが、一真の視線は揺るがない。

<一夜に一の字を付けたって言ったのは葉月だけど、でもそれは朔夜も>

「私も？」

気を取られて、朔夜も友夜のほうを見る。

「葉月は」

言葉を吐き出して、また黙る。

<どう言おう>

友夜は空を仰いだ。満月から少しだけ欠けた月が浮いている。

「葉月は新月が好きだったんだ」

思わぬ言葉に朔夜は驚く。

友夜は朔夜でも一真でもなく、ただ足下を見ていた。

「だから長男には、一の意味も持つ朔の字を使って朔夜にしたいと、結婚したときくらいから言っていた」

朔夜は何も言えない。

一真が、1段階を降りた。あと3段。

「一時期はずっと精神が安定していなかった葉月が、初めての子供だと笑顔を見せた。私は」

一真はさらに降りた。あと2段。

「せめて一の意味が朔夜と一夜をつないでくれないかと願った」

「朔夜と一夜は会いましたよ」

その言葉に顔を上げた友夜の直前の段に、一真は降りてきた。

その拳が軽く引かれているのに気づき、さらに気が宿っていることに目を剥く。

とっさに友夜を横に突き飛ばして、代わりに受けた。

何とかこちらも気を張るのは間に合ったが、勢いで一気に踊り場まで飛ばされる。

着地。足に少し衝撃が来た。

「何のつもりだ、星河!!」

「お前が止めると思ったからさ」

一真は一気にジャンプして朔夜の目の前まで来た。

いきなり破顔する。悪戯が成功した子供のような笑みだった。

「ま、お前だって『お父さん』と言えるんだな。俺と話してるときはずっと名前だったから心配したよ」

「いや、それは、その、別にいいだろう」

何となく照れくさくなつてごまかす。

「お前の一人称が私なのは友夜さんのせい？」

思つても見なかつたことを言われて返答に困る。

「さあ……分からない。そうかもしれないが」

実のところ、自分から話すことがなければ、そこまで一人称というのは使わないのである。

影響を与えたのは、一番言葉を聞いていたはずの友夜かもしれないし、話そうとした頃の春子や鏈かもしれないし、双方かもしれない。

「あ、そうだ。朔の字が新月ならさ、月齢は零じゃないか。一の前にいてもいいと思うよ」

思いついたように、さらりと告げた一真の言葉に息を呑む。確かに、新月まで意味をさかのぼるなら、そう考えられなくもないが。

(それはさすがに屁理屈じゃないか)

口にしようとしたとき、一真が床に座り込んだ。

「ああ、疲れた」

「何だ、唐突に」

「実は俺、素手に気乗せるのって苦手なんだよ。できなくはないけど、ものすごく疲れる」

言われてみれば、警棒や槍を使っているところしか見ていない。

「というわけで俺はここで休んでるから、また明日。ああ、明日じゃないっけ。まあまたそのうち」

座り込んだまま手を振る一真。

「……大丈夫か？」

「何で殴られた側が心配してんだよ。疲れるだけだよ。友夜さん、こいつ連れてって」

友夜も踊り場まで降りてきた。

「言われなくても連れて行くけど……大丈夫かい？」

「残念ながら、丈夫さが取り柄ですからご心配なく」

「だが、星河……」

「ああ、もう！」

親子2人で心配そうに覗き込んでいると、一真が叫んだ。

「どうして親子そろって察しが悪いんだよ。せっかく人が水入らずにしてやろうとしてんのに」

そう言われてしまつては、これ以上ここにもいられない。

「私は」

友夜が口を開いた。

「友夜さん？」

「君に殴られるべきだったんじゃないかな」

言う友夜に、一真は苦笑した。

「じゃあ、俺の願い一つ叶えてもらえます？」

「……できることなら」

<何だろう。やっぱり朔夜に関することだろうか。いい子っぽいからそんなに無理難題は押し付

けてきそうにないけど>

「一夜に、朔夜のこと教えてやって」

一真はさらりと言った。

<それは>

「今じゃなくてもいいよ。もっと後でも。でもいつか」

一真は言葉を紡ぎながら考えているようだった。

「そうだな、こいつに子供ができるまでに。どうです？」

「……私の子供？」

朔夜は思わず復唱した。今日は予想にしない言葉をよく聞く日だ。

<5年は先の話か……。優しいのか優しくないのか>

「私もそう思う」

友夜の心の声に、朔夜も同意する。

「一分かった」

結局友夜は一真の願いを聞き入れた。それが果たされるのはいつか分からないが。

「それと、そいつは自分から言わないだろうから、無理矢理にでもわがまま聞いてやって」

「ああ、そうするよ！」

わざとらしく元気に答えると、友夜は朔夜の腕をつかんで階下に向かう。

「じゃあまずは夕食にしようか。ちょっと遅いけどね」

父親の声を聞きながら、朔夜はぼんやり考えた。

今日はいろいろなことがあったが、収穫もあったのかもしれない。

少なくとも、体以外に母親から受け継いだものがある。

そういうことだ。

起きると見慣れた天井が目に入る。

しかしいつもとは少し違う位置で、朔夜は不思議に思った。

その疑問はすぐに解決される。朔夜はいつものベッドではなく、その隣の床に布団を敷いて寝ていたのである。

自分のベッドに友夜が寝ているのを見て、朔夜は苦笑した。自分の部屋の中の父親。これ以上違和感のある光景もない。

起き上がるときにポケットから何かが落ちるのを感じて、朔夜は動きを止めた。とっさに左手を突くと、小さな、固い感触。

覚えのある感触に、思わず襟元に右手を伸ばす。制服のまま寝てしまったから、いつもの金属の感触が返ってくる。視線をおろすと赤い色が目に入る。

左手の中を見た。

襟元にあるのと同じ2つの三角形が、一点でのみ青い光を反射していた。

「……？」

青い紋証は副会長の物、石の位置が左上なのは流翔。つまりこれは間違いなく流翔副会長の物で、一真が持っているはずの物だ。

もちろん朔夜はそんな物を受け取った覚えはない。しかし、夕方に寝ている間に誰かがポケットに滑り込ませた可能性はある。

「星河？」

だが、何故こんなことをしたのか意図が読めない。

時計を見た。七時半の少し前。

朔夜は父親に書き置きを残して出かけることにした。どうせオートロックだ。

何となく嫌な予感がした。

魔技学園流翔校舎の裏門から入って地下の魔技会室へ向かう。1日目に開祭してから7日目に閉祭するまでずっと祭りは続いているが、少なくとも一般客はこんな時間にはほとんどいない。

そこまで気分が悪くなることもなく会室に入った朔夜を待っていたのは書類に目を通して春子だった。

「おはよう」

「おはよう」

いつも通りに挨拶してくる彼女に同じ言葉で返し。

「……」

机の上の物に押し黙る。

「春宮、これは何だ？」

「昨日の夕方に星河が置いていったぞ」

一真に渡した携帯電話とミニコンピューターだ。

(嫌だ)

何に対してか確定しないまま朔夜は思った。

いつものくせで流翔のコンピューターを点け、起動を待って座る。

「そういえば、苦情受付係を星河と代わったぞ」

春子に言われて顔を上げる。

「何故だ？」

「そこに電話があるのに星河が苦情を受け付けられるわけがないだろう」

そう言われてみればそうなのだが。

裏を返せば、一度引き受けた係を放棄してまで電話を返したことになる。

(嫌だ)

コンピューターが起動した。と、メッセージが一つ。

『設定を初期化しました』

(……は?)

慌てて確認するが、ファイルなどに損失は見られない。どうやら操作条件などに関する設定の話のようだ。

安堵のため息をついてから、気がつく。

このパソコンをカスタマイズしていたのは一真だ。この初期化も彼が行ったものだろう。

彼がカスタマイズしていたおかげでよく分からないこともでき、細かいことは一真によく聞いていた。その状況がよくないと思って設定を戻したのか。

つまり、このパソコンは最早一真がいなくても扱えるということだ。

(嫌だ)

「春宮」

朔夜は青い紋証を取り出してミニコンピューターと携帯電話の横に置いた。

「これは何だと思う？」

春子は書類から目を離してちらりはこちらを見た。

「副流翔の紋証だろう」

「そんなことは分かっている。そうではなくて」

「そうだな、わたしはよく知らないが、普通役職を示す物を上司に返すのは」

上司じゃないが。

「何と言うんだったかな——辞表か。辞任？」

どちらでも意味するところは同じだ。

「何故……」

呟きが自分の口から漏れるのを聞いた。

見なかったふりはできないと言った一真。

——ごめん。

見たからには放っておけないという意味だけではなく、見てしまった謝罪はするという意味だったのだろうか。

こんな。

こんな謝罪は認めない。

パソコンの電源を落として朔夜は立ち上がった。

そのまま一歩踏み出して。

(それが正しいのか?)

足が止まる。

「また何か、無意味にややこしいことを考えている顔だな」

春子が書類を置いて、つかつかと歩み寄ってくる。

目の前の椅子に座り込んで足を組んだ。

「聞いてやる。話せ」

朔夜はのろのろと腰を下ろした。

「私は」

何を言おう。

「私は星河にやめてほしくない」

「なら、そう言いに行ったらどうだ？」

「だが……」

それを止めた理由。

「実はやめた方がいいんじゃないだろうか」

「どっちなんだ？」

「つまり、その、やめた方が星河のためではないかということだ」

仕事は彼がいなくてもできないわけではないし、魔技会役員というのは危険なポジションでもある。

「それはお前が決めることなのか？」

春子があっさり言って、朔夜は言葉に詰まる。

「大体、副流翔でなくても流翔の友人であるだけでも狙われることに変わりはないだろう」

「それはそうなのだが」

「それとも友人であることもやめるつもりか？」

「そんなことはない！」

反射的に反論して、自分でも少し驚く。

「星河は今までだって軽く撃退してきただろう？」

「今までと言っても、まだ1ヶ月にもならない」

「ならお前は、わたしにもやめろと言うか？」

「は？」

予想だにしない言葉に絶句する。

「そんなことは……思ってみたこともなかったな」

「何だそれは。友情の差か？」

「君がいないここを想像できない」

朔夜が流翔魔技会に入る前からいるせいだろうか。

「まあ話を戻すか。わたしの意見を言ってもいいか？」

「むしろ言ってくれ」

朔夜が促すと、春子はずばりと言った。

「友人も作れない流翔などやめてしまえ」

「……何だって？」

それこそ欠片も考えたことのない話だった。

「私が流翔をやめる、か」

想像しようとしてみた。

「……」

「まあ無理だろうな」

言い出した春子がいきなり否定する。

「何故」

「向いていない」

何だそれは。

「聞島がやめるまで、私は一般人だったんだぞ」

「お前は人の下にいるのに向いていない」

「言い出しておいて……」

文句を言いつつ、考えてみる。

「確かに、この仕事は嫌いではない」

やめたいわけでもない。

「つまりこういうことだ。お前は星河に友人でいてほしいと思っている」

「ああ」

「できれば副流翔でいてほしいとも思っている」

「まあ、そうだな」

「しかし危険な目には遭ってほしくない」

「ああ」

「そして、流翔をやめたくもないと」

「ああ」

「なら、星河は何故副流翔をやめるのだと思う？」

一瞬考えるが、答えは変わらない。

「義理堅いからじゃないのか？」

「そうかもしれないな」

春子の曖昧な言い方に眉をひそめる。

「違うのか？」

「誰もそんなことは言っていない。が」

「が？」

「わたしには星河の考えは量りかねる」

そう言われてしまうと弱い。

「つまり、これが謝罪だというのは推論でしかないということか」

「推測だけを元にしてうじうじしているなということだ。うじ虫め」

「語感が似ているからといって、それは言いすぎだろう……」

春子の勢いに圧されて立ち上がる。と。

「待て。私がしていたのは、星河が何故やめたかという話ではなく、やめた状態で無理に引き止めるのはどうかという話で」

「その結論はまだ出ていなかったのか？ 簡単じゃないか」

春子は言い切った。

「星河は決して弱くはないし、危険になったらお前が助ければいいだけのことだろう。第一、お前の友人であるだけで狙われる可能性はあるし、そちらは言っても星河はやめないだろうな。そもそも、今迷うくらいなら最初から誘うな」

その言葉よりも態度に、朔夜は呆れる。

「君にかかると、物事が非常に単純だな」

「星河ほどではないだろう」

その一真の考えが量れないと言ったのは誰だ。

「行ってくる」

出口に向かいかけて、先ほどとは違う理由で足を止める。行動の理由と言えば。

「そういえば君は、何故星河にあんなこと書いて渡したんだ」

誘拐云々の紙である。

「ああ。星河はやはり、穏便な方を使ったのだろう？」

「もしかして……君は冗談でないつもりで渡したのか？」

「お前なしでしか成り立たない家庭など壊れてしまえ」

春子の発言に朔夜は息を呑む。

あまりに過激だ。

過激だ、が。

「行ってくる」

ため息をついてもう一度くり返し、部屋を出る。

数は少なくとも、ある意味、友人に恵まれてはいるらしい。

一真の家に行くと、ピアノの音が聞こえた。どうやら一真はいるらしい。

この前に比べると間違いが目立つので、曲のレベルが違うのかもしれない。

少しためらってから、チャイムのボタンを押す。

鳴らない。

そういえばこの前はチャイムを鳴らさずに電話を鳴らしたのだった。などと思い起こしていると、ピアノの音が途切れ、ばたばたと足音がしてドアが開いた。

「あ、おはよう」

一真だ。「おはよう。鳴らなかったようなのだが」

「中では鳴ってるから大丈夫」

修理しろ。

「ま、茶ぐらいは出すよ。どうぞ」

「いや、そんなにのんびり」

話すつもりはない、と言おうとした朔夜を無視して一真はさっさと中に引っ込んでしまった。

呑気な一真の様子に、気負ってきた朔夜は戸惑ったが、靴を脱いで上がり、気がつく。

(そういえば、用件を聞かれなかったな)

むしろ一真は待ち受けていたのかもしれない。

(さて、何をどう言うか)

道々も考えてこなかったわけではないが、決めかねてはいた。

部屋に入って一真と向き合ってみたが、いきなりうまい言葉が出てくるわけもない。

それでも伝えることは伝えようと思って口を開く。

「星河」

「何だ？」

顔を上げる。一真の視線とぶつかったが、たじろぐが、気圧されてもそらさないでおこうと決める。

「私は、これを受け取るつもりはない」

紋証を卓袱台の上に置く。

「何で？」

「それはこちらの台詞だ」

軽く非難の口調を込めて睨みやると、一真の方から視線をそらした。意外だ。

「理由ね、理由は……」

「理由は？」

「お前の情報、うちのコンピューターで覗いちゃっただろ？」

「謝罪のつもりなら……」

断る、と続けようとした朔夜を、一真が遮った。

「謝罪？ ああ、まあそれもあるけど。何て言うか……」

違うらしい。

予測が外れたので、とりあえず一真の言葉を待つ。

「ああいうのって、うちじゃ無理だろ？」

「うち？ と言うのは、自宅のことか？」

一真は頷く。

「うん、そう。つまり、副流翔じゃなけりゃ調べようとしても無理だっただろうってことだよ」

「それはそうかもしれないが……だから？」

「どう思う？」

「どう？」

それが聞きたいのだが。

「じゃあ、どう思った？」

いささか質問のニュアンスが変わった。

「俺がお前のこと調べたって聞いたときに、いい気分したか？」

重ねて問われて、言葉に詰まる。それは。

「今回はいい方に転がったみたいだけど、それは結果論でさ。でも、同じようなことがあったらまた調べちゃうだろうし、行動するとも思う。その相手はお前かもしれないし、違う奴かもしれない。今度は傷つけるかもしれない。……どう思う？」

朔夜はひそかに感嘆した。思った以上に深く、一真は考えていたらしい。

この場合、問題になっているのは、権力という名の力の使い方だ。

朔夜がこの立ち位置にいるのはこの仕事が好きだから、だが、なら、一真は？

「君は副会長の仕事が嫌いか？」

「いや？ 俺はコンピューターいじるくらいしかしてないけど、それでいいならすごく好き」

まあそうだろう。見ていれば分かる。

「でも、コンピューターいじりなら、結梨さんところに入入りさせてもらえれば使えるし」

古降谷結梨は一代前の流翔書記で、流翔のコンピューターメンテナンス担当だ。一真は個人的にコンピューター関連を教わっているようだが。

「待て。古降谷先輩のところと言えば、唯波研究室じゃないのか？」

「うん。何回か行ったし、唯波さんにも会ったよ」

朔夜は呆れた。それでは前提が変わってしまう。

「星河……。唯波研究室なら、うちの会室以上のことがいくらでもできるだろう。少なくとも調べもの程度なら」

「……あれ？」

一真は首をかしげた。

「情報以外の権力に関しても、私は、君が間違うとは思わない。君が常に迷いながら最善を目指すのなら尚のことだ」

断言し、紋証を一真の方に弾く。

一真は紋証に視線を落とし、苦笑した。

「そこまで力強く言われると、むしろ疑わしいぞ」

ここまで言葉を紡いでもまだ、一真は紋証を受け取らない。

ダメなのだろうか。

「……一生分のわがままをここで使っても？」

言うと、さすがの一真も驚いたように目を見開き、次いでまた苦笑した。

「熱烈だなあ」

大体、わがままだ親に言うもんだって言っただろ、などと呟きながら紋証に手を伸ばす。

「分かったよ。分かったから、ちゃんと友夜さんにもわがまま言ってやれよ？」

一真が紋証を握りこんだのを確認して、朔夜は息をついた。

「親でない割には、やけにあっさりわがままだを聞いてくれるんだな」

愚痴のように言うと、一真は少し気まずそうに頭をかいた。

「うーん。だってこの場合はさ、俺がやめても力と責任はお前と春宮に行くだけだろ？ お前らに押し付けてまで悩むのを放棄する気はないよ。だから」

一旦言葉を切って、卓袱台越しに朔夜の頭をぽんぽんと叩く。

「お前がこれを持ってきたら、ちゃんと受け取る気でいたよ」

(……は?)

「なら、さっきまでのやり取りは何だ」

「うーん、悩んでたのも嘘じゃないし。お前が来なきゃそのままやめるつもりだったんだ。だからさっきのはまあ、俺が行動するときに迷ったら相談に乗ってくれよ、っていう先取り予約と、あとは、きちんと望みは口に出せてことだ」

朔夜はため息をついた。春子の言うとおりに、一真の考えは簡単に読めるものではないらしい。

「分かった。もういい。では、また来週」

一真に声をかけ、朔夜は席を立つ。

「おう、またな。友夜さんによろしく」

青い紋証は一真の手に戻り、明日からも変わらない日々が約束される。

そのことに感謝しつつ、朔夜は日の光の下に出た。